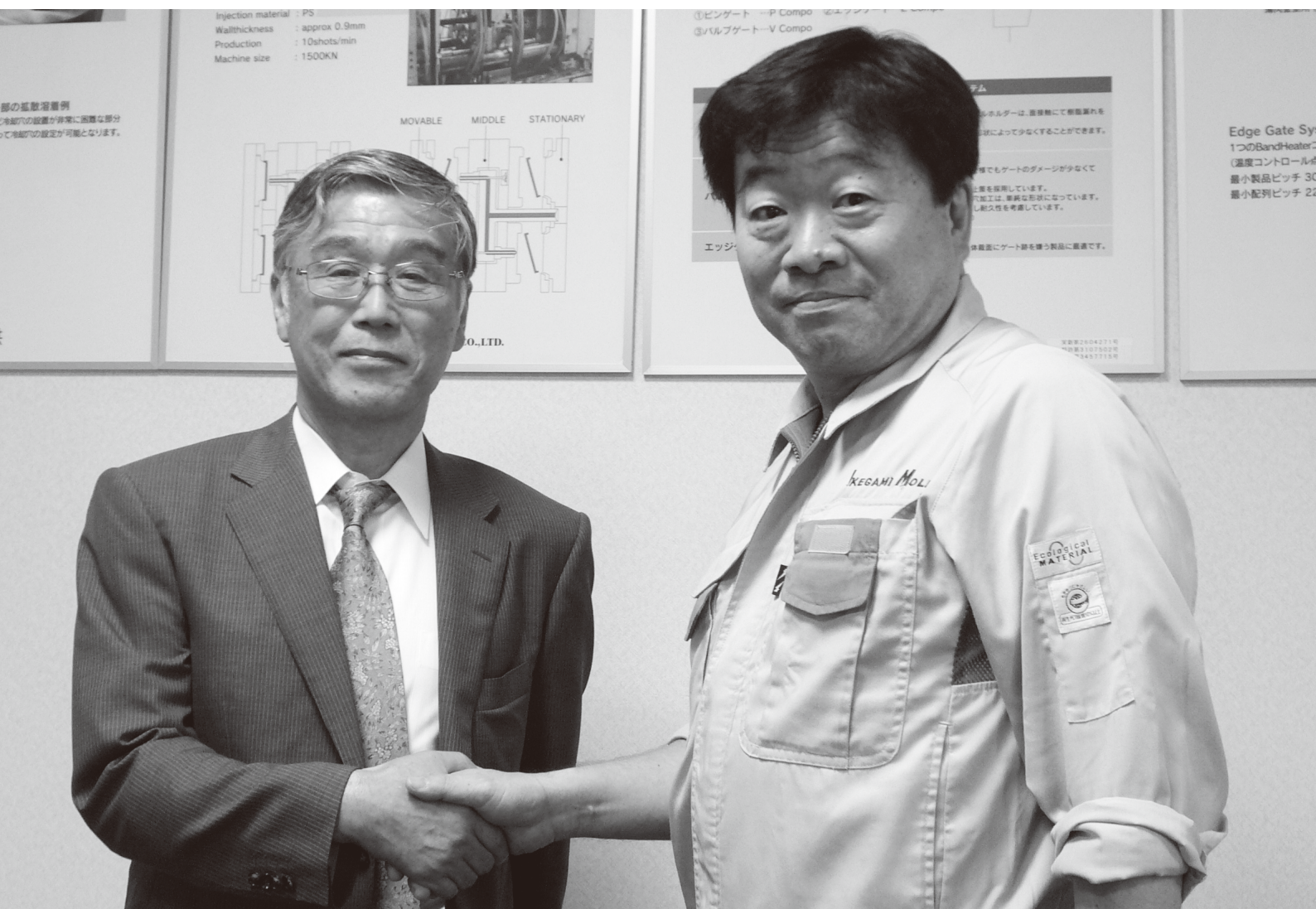




企業トップに聞く！

第22回

厳しい経済状況のなか、躍進をつづける企業はどのような理念や方針を打ち立てているのか？
企業トップの視点から俯瞰するものづくりのあり方、乗り越えてきた課題、今後の展望など
について、お話をうかがうシリーズです。

■ 齋藤 義夫

砥粒加工学会 会長
東京工業大学 教授

■ 池上 正信

池上金型工業株式会社
代表取締役社長



齋藤会長（以下、齋藤）：池上金型工業といえば、射出成形用の金型専門メーカーでは国内五指に入る企業ですね。主要な取り扱い金型も、自動車から家電、通信機器、そして医療や食品のプラスチック型などなど…。目には見えませんが、我々が生活する中で、池上金型工業さんの金型でつくられた製品を手にしないときはないのではないかと思います（笑）。

御社の創業者で、池上社長の御祖父であられる盛寿さんは、日本の金型業界の基礎をつくった方だといわれていますね。そして二代目社長であるお父上の恵蔵さんとともに日本金型工業会の会長を歴任されている。まさにこの業界での礎を築いてこられたお二方であるといえるでしょう。池上社長が三代目を継がれてからも、経済産業省の「元気なモノ作り中小企業 300」や「雇用創出企業 1400」に選出されておられる。三代にわたって、輝かしい業績を残されておりますね。

池上社長（以下、池上）：ありがとうございます。でも、私の代になって評価をいただいたことは、ひとえに社員たちの努力の賜物、そして 50 年以

上「いい金型をつくることでユーザに喜んでもらいたい」と絶えず努力を重ねてきた父の姿勢があつてこそだと思っています。

齋藤：御社は昭和 9 年、蒲田で創業されたそうですね。当時から金型を扱われていたのですか？

池上：いえ、創業当時は東京下町の鉄工場でした。その後軍需産業優先の時代背景のなか、当社も精密ネジ研削盤を製造していました。「池上金型工業」として成形用金型の専門メーカーになったのは昭和 30 年代の前半です。

齋藤：今はどのような分野が主流なのですか？

池上：5 年ほど前までは薄型テレビの筐体用金型でした。今は自動車分野へ展開しています。

齋藤：薄型テレビ市場では、残念ながら日本は海外勢に負けてしまった形になりましたからね。

池上：そうですね。金型の注文も激減しました。

齋藤：薄型テレビ自体は売れているので、金型のニーズはあるでしょう？ なぜ金型業界もビジネスが厳しくなってしまったのでしょうか。

池上：大企業が金型にかかる費用を少なくするために海外生産を委託したり、委託相手にはすでに下請けがいて参入できない状況にあったことなどが考えられるでしょうね。

齋藤：そういった背景を考えると、御社のように幅広い分野を手がけてこられた企業の強みが出そうですね。自動車分野以外にも主力となる分野はありますか？

池上：食洗機や掃除機などの家電プラ製品金型も主力です。

齋藤：医療や食品分野も手がけていると伺ったのですが、どのようなものですか？

池上：たとえば注射器本体の金型や、型内に使用される精密コアピンなどですね。これは長くて細い棒なので、研削するとなつて精度が狂うのですが、当社の精密金型は 2 ミクロンの加工精度を達成しています。

齋藤：それはすごいですね！

池上：食品分野では、マヨネーズ等のヒンジ付キャップなどでしょうか。医療や食品分野にかぎ

りませんが、新しい材料がどんどん出てきますので、常に開発を伴いますね。

◆天皇陛下の行幸は、 親孝行にもなりました

齋藤：池上社長は学習院大学の法学部ご出身だそうですね。学生時代はサッカー部に所属されていたとか。さぞ華やかな学生時代を送られてきたのでは…？

池上：そんなことはありませんよ（笑）。学生時代は4年間、御徒町のアメ横で魚売りのアルバイトをしていました。魚はその日のうちに売りさばかないと腐ってしまいます。そういったものを店頭販売で売るとは、今思えば貴重な体験となりました。

齋藤：文系の大学をご卒業されたとはいえ、理系にもお強かったのですか？

池上：いえ、私は技術については全く知らないのです。先代社長である父は東北大学で精密工学を専攻した技術屋で、アメリカから金型ビジネスを導入しましたが、今では私が工場を見回す際、文系の私でも15分で「品質」「生産性」「スキルアップ」がすぐ理解できるよう、VM活動としてわかりやすく掲示してもらっています（笑）。

齋藤：ああ、工場を拝見させていただいたときに目にしました。あれはわかりやすいですね。工場内で最高の性能を誇る工作機械が稼働していたことにも感銘を受けました。

池上社長は大学ご卒業後にコンピュータ関連企業に就職された後、昭和59年に御社に入社しておられますね。社長になられたのは平成8年ですが、家業である御社への入社にあたっては、どのような経緯があったのでしょうか。

池上：金型業界では基本的に職人の世界で、その熟練した技術や経験が生かされてきましたが、時代の流れにつれ、CAD/CAMやCNCといったコンピュータによる設計や機械加工へと変化していきました。そんななか、父である先代社長から手伝ってくれないかと相談を受けたので



す。「横文字用語ばかりで、説明を受けてもさっぱりわからない」と。それまでの私は好きなことばかりやってきましたから、自分が理解できることが少しでも役に立ち、親孝行になれば…と思い、入社を決めました。

齋藤：平成21年には現職のまま日本工業大学院（専門職）技術経営研究科修士課程を2年間で修了されていますね。御社の社長のみならず Ikegami Mold of America/Mexico の社長業もこなしながらでは、並大抵のことではなかったと思います。御社は生産拠点を海外に移転するなどグローバル展開もされていますが、これはどういった狙いからですか？

池上：ユーザー業界の成熟化とともに海外での生産が進んだこともあります。お客様の近くですぐに対応することと、人件費の高い日本ではなかなか生産メリットが上がらない点も大きいですね。海外で成功するためには、異文化（価値観、習慣や宗教）理解がもっとも重要であると考えています。

齋藤：今年で創業80周年を迎えられた御社で

すが、平成 21 年に 75 周年を迎えられた際には、天皇陛下が行幸でご視察にいらしたそうですね。

池上：陛下がお見えになることは内緒だったので、陛下にお出しするカステラとコーヒーは他の人に頼めず、私が前日、日本橋に買いに行きました。会長である父も、1ヶ月前からご視察ルートにあたる工場ないの改装工事を手がけるなど、親子で全力で対応しました。陛下でご視察の際に随行するのは私一人だったのですが、会長である父も加えていただいて、親孝行ができたと思います。冒頭でお話したように、父は 50 年以上にわたり「いい金型をつくって、お客様に満足してもらいたい」と仕事ひと筋で取り組んできました。そうした長年の努力がひとつのかたちとして認めていただけたと考えると、とてもありがたいことです。

陛下はとても好奇心旺盛な方で、工場内の社員にも気さくに質問されたり、加工に際して「目が疲れませんか」などの温かいお言葉をかけてくださいました。質問された社員が緊張のあまり金型専門用語で答えてしまい、私が慌ててご説明を加える一場面もありましたが、今ではそれもいい思い出です（笑）。

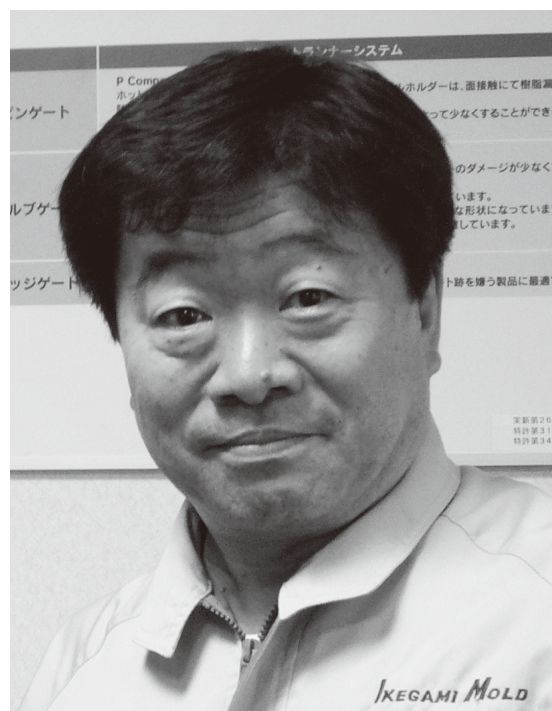
齋藤：今後はさらに会社を大きくしていこうとお考えですか？

池上：金型は受注生産なので最適な規模があり、大きければいいというものではないと考えています。150 ～ 200 人の規模を維持することが望ましいと思いますね。祖父も、父も、私も、会社を大きくして金をたくさん貯めようとか、儲けようという考えはないんです。そんな能力もありませんしね（笑）。ご縁があったお客様や従業員、その家族の役に立つことが目標なんですよ。

◆今後、学会に期待することとは

池上：中小企業が勉強する機会を提供する場であってほしいですね。大学の先生方とコンタクトできるきっかけの場として期待しています。ただ、学会の扱う範囲は広く、自分たちのビジネ

スは限定されているため、合致する部分が少ない場合もありますが…。金型技術は、国が後押しをしている一部の海外では圧倒的に優れています。ドイツやアメリカなどのマイスター制度もそうですね。社会的評価も高く、技術開発を奨励する環境が整っている。日本では大企業の下請け的な位置づけであり、常に納期とコストとの妥協が必要ですので、これらの国々にはかなわないのではないかと危惧しています。「金型技術は日本のお家芸」とも言われますが、私個人の印象では、前述の海外の国々の技術を金メダルとすると、日本はまだ銅メダルといったレベルです。われわれ自身の努力はもちろんですが、今後はぜひ大局的な取り組みとして、日本の金型技術の底上げと突出がなされることを願っています。



池上 正信（いけがみ まさのぶ）

昭和 34 年生まれ。58 年学習院大学法学部卒業後、(株)ビーコンシステム（現(株)リンクレア）入社。59 年 10 月池上金型工業(株)入社。平成 8 年 7 月同社社長、Ikegami Mold of America/Mexico 社長就任。